

# 浮舟

泉鏡花

青空文庫



「浪花江なにわえの片葉かたはの蘆あしの結むすぼれかかり——よいやさ。」

と蹠よろり跟ぞうりとして、

「これわいな。……いや、どっこいしょ。」

脱だついで提ちげたる道中ちよつと笠、一寸左手ちよつとに持換もちかえて、紺こんの風呂敷ふし、桐油包とうゆづつみ、振分けふるわけの荷にを両方りやうほう、蝙蝠こうもりの憑物もちものめかいて、振落ふるおしそ  
うに掛かけた肩かたを、自棄やけに前まへに突ついて最も一ひとつ蹠よろ跟りける。

「……解とけてほぐれて逢あう事もか。何を言いやがる。……此方こつちあ可い  
い加減とろに溶とけそうだ。……まつにかいあるヤンレ夏の雨あま、かい……

…とおいでなすつたかい。」

さつと沈めた浪の音。磯馴松そなれまつは一樹ひとき、一本ひともと、薄い枝に、濃

い梢に、一ツずつ、翠みどり、淡紅色ときいろ、絵のような、旅館、別荘の窓灯

を掛連ね、松しょうろ露が恋に身を焦す、紅提灯ちらほらと、家と家と

の間を透く、白砂に影を落して、日暮の打水うちみずのまだ乾かぬ茶屋

の葭簣よしずも青あお薄あおすすき、婦の姿もほのめいて、穂に出て招く風情あり。

此処ここは二見ふたみの浦づたい。

真夏の夜の暗闇やみである。この四五日、引続く暑さと云うは、日ひ

中なかは硝子ビイドロを焼くが如く、嚇かつと晴れて照着てりつける、が、夕風ゆうなぎとと

もに曇どんよりと、水も空も疲れたように、ぐつたりと雲がだらけて、

煤色すすいろの飴の如く粘ねばねば々と搔曇かきくもって、日が暮れると墨を流し、

海の波は漆を畝うねらす。これでいて今夜も降るまい。癖なに成つて、

ひとしづくの風を誘いざなう潮の香かもないのであつた。

男は草鞋穿わらじばき、脚絆きやはんの両脚もろづね、しやんとして、恰あたかも一本の杭  
の如く、松を仰いで、立停たちどまつて、……眦まなじりを返して波を視みた。

「ああ、唄じやねえが、一ひとあめほ雨欲ほしいぜ……」  
俄然がぜんとして額を叩いて、

「慌ろくてまい。六ちゃん、いや、ちやんと云う柄じやねえ。六公ろくこう、  
六ろくでなし、六ろく印くじるし、月六齋つきろくさいでいやあがら。はははは。」

肩を刻んで苦笑いして、またふらふらと砂を踏み、

「野宿に雨は禁物でえ。」

その時躡つまずく。……

「これわいな！ 慌てまいとはこの事だ。はあ、松の根ツ子か。この、何でもせい。」

岸辺の茶屋の、それならぬ、渚の松の舫船。——六蔵は投遣りに振った笠を手許に引いて、屈腰に前を透かすと、つい目の前に船首が見える。

船は、櫂もなく艫もなしに、浜松の幹に繋いで、一棟、三階立は淡路屋と云う宏壮な大旅館、一軒は当国松坂の富豪、池川の別荘、清洒なる二階造、二見の浦の海に面した裏木戸の両の間、表通りへ抜路の浜口に、波打際に引上げてあつた。

夫女巖へ行くものの、通りがかりの街道から、この模様を視めたら、それも名所の数には洩れまい。舷に鰯は飛ばないでも、

舳へびぎに蒼い潮の鱗。船は波に、海に浮べたかと思われる。……が藍あいを流した池のような浦の波は、風の時も、渚に近いこの船底を洗いはせぬ。戯たわむれにともづなの舫もやいを解いて、木馬のかわりにぐらぐらと動かしても、縦横に揺れこそすれ、洲すばし走りに砂をすべ這つて、水に攫さらわれるような憂うれいはない。

気の軽い、のん気な船は、件くだんの別荘の、世に隔てを置かぬ、ただ夕顔の杖ばかり、四ツ目に結った竹垣の一重を隔てた。濡縁ぬれえん越ごしの座敷から聞え来る三味線の節の小唄の、二葉三葉ふたはみは、松の葉に軽く支えられて、流れもあえず、絹のような砂の上に漂つているのである。

## 一一

「この何でもせい。……住吉の岸边の茶屋に、よいやさ。」

と風体ふうとう、恰好やぐざ、役雑やくざなものに名まで似た、因果小僧とも言いそ  
うな這奴しやつ六蔵は、その舷ふなばたに腰を掛けた、が、舌打して、

「ちよツ面倒だ。宿銭とまりは鏹びたでお定さだまり、それ、」

と笠を、すぼりと落し、次手ついでに振分の荷を取つて、笠の中へ投  
げ込んで、

「いや、お泊りならばア泊らんせ、お風呂もどんどん湧いている、  
障子もこの頃はりかえて、畳もこの頃かえてある。——嘘を吐き  
やあがれ。」



空手を組んで、四辺あたりを見たが、がツくりと首を振って、

「待てよ……青天井が黒光りだいなびかりちつ。電は些と気が無えがね、二見ヶ

浦は千畳敷、浜の砂は金銀……だろう、そうだろそうだろ然うでそある。成程どんどん湧いていら、伊良子ヶ崎までたつぷりだ。あ

あ、しかし暑いぜ。」

腕まくりを肩までして、

「よく皆、瓦かわらの下の、壁の裡なかへ入つてやがる。」

瓦の下、壁の裡、別荘でも旅館でも、階下したも二階もこの温気うんきに、

夕風うしおの潮を避け、南うけに座を移して、伊勢いせ三郎が物見松ものみのまつに、

月もあらば盗むべく、神路山かみじやま、朝熊嶽あさまがたけ、五十鈴川、宮川の風

にこがれているらしい。ものの氣勢けはいも人声も、街道向むきは賑にぎやかに、

裏手には湯殿の電燈の小暗きさえ、燈は海に遠かつた。

六蔵ニヤニヤと独ひとりえみ笑して、

「お寝間のお伽とぎもまけにしてと——姉さん、真個ほんとかい、洒落しやれだぜ

洒落だぜ洒落じゃねえ。入いらつしやい、お一方ひとかた、お泊ひでござい

ますよ。へい、お早つぎさまいお着様で、難ありがと有う存じます。これ、御お

濯すすぎ足の水を早くよ。あいあい、とおいでなさる。白地の手拭てぬぐい、

紅たすきい襷やわらかよ……柔やわらかな指で水と来りや、俺たらいあ盥たらいで金魚に化けるぜ。金

魚うや、金魚う。」

と可いい気な売声。

「はてな、紺がすりに、紺の脚絆、おかしな色の金魚だぜ。畜生

め、鯰なますじゃねえか。勿はねる処は鮎やつだ奴やつさ。鮎やつだ、鮎やつだ、鮎ふなざむれえ侍

だ。」

と胸を揺つて、ぐつと反つたが、忽ち肩ぐるみ頭をすくめて、

「何を言やあがる。」

で、揚あしを左の股、遣違いにまた右で。燈は遠し、手探りを、何の気もなく草鞋を解いて、びたりと揃えて、トンと船底へ突込むと、殊勝な事には、手拭の畳んで持ったをスイと解き、足の埃をはたはたと払って、臀で楫を取って、ぐるりと船の胴の間にのめり込む。

「御案内引あいあい……」

と自分で喚き、

「奥の離座敷だよ、……船の間——とおいでなすつた。ああ、

佳いい見晴みはらし、と言いいてえが、暗くくツて薩張さつぱり分らねえ。」

勝手ほぎな事を吐くうちに、船ふねの中なかで胡坐あぐらに成なつた。が兔うさぎが權かゝいを押おさないばかり、狸ねこが乗のつた形かたちである。

「何なに、お風呂ふろだえ、風呂ふろは留やめだ。こう見みえても余あまり水心みづこゝろのある方かたじゃねえ。はははは、湯ゆに水心みづこゝろも可おかし笑わいが、どんどん湧わいてるは海うみだらう。——すぐに御膳ごぜんだ。膳ぜんの上うへで一銚いちしやう子こよ。分わつたか。脱ぬ落かりもあるめえが、何なにぞ一ひと品しな、別べつの肴さかなを見繕みとつてよ、と仰おほせられる。」

と仰おほせられ、

「ああ、いい酒さけだぜ、忠兵衛ちゆうべゑのおおふくろかい、古ふるい所ところで……妙み妙よう爛らん。」

と二つばかり額を叩く。……暢のんき気さも傍ぼう若無じゃくぶじん人で、いずれ野宿の、ここに寝てしまうつもりでいよう。舩船を旅籠とより、名所を座敷にしたようなことを吐ぬかす。が。僅わずか一ひととき時ばかり前、この町通り、両側の旅籠の前を、うろついて歩ある行いた折は、早や日も落ちて、脚にも背にも、放浪の陰の漾ただよつた、見るからみじめな様子であつた。

## 三

黄昏たそがれに、御泊おとまりを待つ宿引女やどひきおんなの、廂ひさしはずれの床几しょうぎに掛かけて、島田、円鬚まるまげ、銀杏返いちようがえし、撫なでつけ髪かみの夕化粧、姿ななめを斜ななめに

腰を掛けて、浅葱あさぎに、白に、紅に、ちらちら手絡てがらの色に通う、団う扇ちわの絵を動かす状さま、もの言う声も媚なまめかしく傾城町けいせいまちの風情がある。浦づたいなる掃いたような白い道は、両側に軒を並べた、家居いえいの中を、あの注連しめを張った岩に続く……、松の蒔絵まきえの貝の一筋道。こおりみせ やすみぢやや 氷 店、休茶屋、赤福売る店、一膳めし、就なかんずく中、鶉ひよどりの鳴くように、けたたましく往来ゆききを呼ぶ、貝細工、寄木細工の小女どもも、昼から夜へ日脚ひあしの淀みに商売あきなの逢魔おうまヶ時どき、一時鳴を鎮めると、出女の髪が黒く、白粉おしろいが白く成る。

優しい声で、

「もし、お泊りかな。」

「お泊りやすえ。」

彼方あつちでも、お泊りやす、此方こつちでも、お泊りやす、と愛嬌声の口許は、松葉牡丹の紅である。

「泊るよ。」

其処そこへ、突掛つツけに 紺がすりの汗ばんだ道どうちゆう 中ちゆうを持って行く  
と、

「はい、お旅籠は上中下と三段にございますがな、最下等にいたしましても……」

何どうして、こんな旅籠へ一宿出来よう、服装みなりを見ての口上に違いないから。

「何だ。無価ただ泊めようと云うのじゃねえのか。」

「外ほかを聞いておくんなはれ。」

「指揮さしずは受けねえ。」と肩を揺つて、のっさり通る。

「お泊りやす。」

「俺か。」とまたずつと寄る。

「否いいえ、違ちがいまんの。」

「状ざまあ見ろ、へへん。」

と、半分白い目で天を仰いで、拗ねたようにそのまま素すど通おり。

この辺あたりとて、道者宿、木賃泊りが無いではない。要するに、容よ子うすの好よい婦人たばが居て、夕ゆうべをほの白く道中を招く旅籠では、風体のかく恚いの如ごとき、君を客にはしないのである。

荷にも石いしが瓦わら、古新聞、乃至ないし、懐ふところ中からは空からつぽでも、一度目指した軒を潜つて、座敷に足さえ踏掛ふんがくれば、銚子を倒し、椀を替



え、比目魚だ、鯛だ、と贅を言つて、按摩まで取つて、ぐつすり寝て、いざ出発の勘定に、五錢の白銅一個持たないでも、彼はびくとも為るのではなかつた。

針が一本——魔法でない。

この六でなしの六蔵は、元来腕利きの仕立屋で、女房と世帯を持ち、弟子小僧も使つた奴。酒で崩して、賭博を積み、いかさまの目ばかり装つた、己の名の旅双六、花の東都を夜遁げして、神奈川宿のはずれから、早や旅銭なしの食いつめもの、旅から旅をうろつくこと既にして三年越。

右様の勘定書に対すれば、洗つた面で、けろりとして、

「おう、仕立ものの用はねえか。羽織でも、袴でも。何にもなき

やきようかたびら経帷子を縫つて遣ら。勘定は差引だ。」

女郎屋の朝の居残りに遊女おんなどもの顔を刺あたつて、虎口ここうを遁のがれた床屋がある。——それから見れば、旅籠屋や、温泉宿で、上手な仕

立は重ちようほう宝で、六の名は七しち同然、融ゆうずう通は利き過ぎる。

もつと

尤も仕事を稼こづかいぎためて、小遣のたしにするほどなら、女房を棄あきらめて流浪なんかしない筈。

からつけつの尻しりつぱしより端折、笠かさいちがい一蓋の着きたツ切雀きせずめと云うも恥かかしい阿房鳥あほうどりの黒扮装くろいでたちで、二見ケ浦ねぐらに疇ねぐらを捜して、

「お泊りだ、お一人さん——旅籠は鏢びたでお定きまり、そりや。」と指二本、出で女おんなの目め前まへへぬいと出す。

誰あいてが対手に成るものか、黙もくつて動かす団扇の手は、浦風を軒に

誘つて、背後うしろから……塩花しおばな塩花。

## 四

六は門かどなみ並六七軒。

風体と面つらがまえ構で、その指二本突出して、二両を二百に値切つ

ても、怒つて喧嘩はしないけれど、誰たれも取合うものはなし。

いぎ、と成れば、法もかく、手心は心得たが、さて指さしあた当つて、

腹は空く、汗は流れる、咽喉のどは乾く、氷屋へ入る仕覚しがくも無かつた。

すねた顔つらつき色、ふてた図ずうたい体、そして、身軽な旅人の笠かさ捌さばき

で、出女の中を伸歩のしある行く、白徒しれものの不敵らしき。梁山泊りようざんぱくの割わ

符りふでも襟つかれに縫込んでいそうだったが、晩の旅籠よそめにさしかかったうえと疲労は、……六よ、怒るなよ……實際余所目には、ひよろついで、途方に暮れたらしく可哀あわれに見えた。

この後を、道の小半町こはんちよう、嬉しそうに、おかしそうに、視ながめ視め、片頬笑みをしながら跟ついて歩行あるいたのは、糊あじのきいた白地の浴衣ゆかたに、絞りの兵児帯へこ無雑作むざつさくにぐるりと捲まいた、耳みみもと許もとの青澄あざんで見えるまで、頭かみのけ髪けの艶つやのいい、鼻筋はなすねの通とつた、色の浅黒あざくろい、三十四五の、すつきりとした男で。何処どこにも白粉おしろいの影かげは見えず、下宿屋かみやの二階ふたかいから放ほう出りだした書生しよせいらしいが、京阪地かみがたにも東京とうきやうにも人の知しつた、巽たつみたつきち辰たつみ吉きちと云いう名題なだいの俳優やくしや。

で、六が砂まぶれの脚絆あしづなをすじりもじつて、別荘べつしやうの門かどを通とつた

のと、一足違いに、彼は庭下駄で、小石を綺麗に敷詰めた、間あいあ々に、濃いと薄いと、すぐって緋色なのが、やや曇つて咲く、松葉牡丹まつばぼたんの花を拾つて、その別荘の表の木戸を街道へぶらりと出た。

巽は時に、酔ぎましの薬を買いに出たのであつた。

客筋と云うのではない、松坂の富豪池川とは、近い血筋ほどに別べっこん懇な親類交際づきあい。東に西に興行の都度つど、日取の都合が付きさえすれば、伊勢路に廻つて遊ぶのが習いで、別わけて夏は、三日なり二日なり此処に來ない事はないのであつた。

今度も、別荘の主人が一所いっしょで、新道の芸妓お美津みつ、踊りの上手なかるたなど、取とりまき巻大勢と、他に土地の友だちが二三人で、

昨日から夜昼なし。

向う側の官営煙草、兼ねたり薬屋へ、ずっと入つて巽が、

「御免よ。」

「はい、お出でなさいまし。」

唯、側対いの淡路屋の軒前に、客待うけの円鬚に突

掛つて、六でなしの六蔵が、（おい、泊るぜえ）を遣らかす処。

——考えても——上り端には萌黄と赤と上草履をずらりと揃えて、

廊下の奥の大広間には洋琴を備えつけた館と思え——彼奴が風体。

傍見をしながら、

「宝丹はありますかい。」

「一寸、ござりまへんで。」

「無い。」

「左様さやいで、ござりません。仁丹が可ようござりますやろ。」と夕ゆうま間暮ぐれの薬くすり箆すり筒だんすに手を掛ける、とカチカチと鳴る環かんとともに、額の拔上おきつた首を振りつつ大な眼鏡越おきにじろりと見るや。

「宝丹が欲しいんだがね。」

「強えらい、お生憎あいにくさま様で。」

「お邪魔を。」

「何なんうだ、姉あねえ、これだけじゃ。」

六むは再指また二本。

この、笠かさぐるみ振分けまを捲まくり手ての一方ひとへ、禪ぜんも見みえる高たか端ば折し、脚絆かかばかりの切草鞋きくさで、片腕ひとを揮なつたり、挙げあげたり、鼻はなの下したを擦す

つたり、べかこと赤い目を剥いたり、勝手に軒をひやかして、ふらふらと街道を伸のして行くのが、如何にも舞台馴れた演種しぐさに見えて、巽はうかうか独ひとりえみ笑してその後あとに続いたのである。

## 五

やがて一町ひとまち出はずれて、小松原に、紫陽花あじさいの海の見える処であつた。

「君、君。」

何と思つたか、巽がその六でなしを呼んだのである。

「ええ、手前で、へい。」と云うと、ぎっくり腰を折つて、膝の



処へ一文字に、つん、と伏せた笠の上、額を着けそうにして一ツおじぎをした工合が、丁寧と言えば丁寧だが、何とも人を食つた形に見える。

辰吉は片頬笑して、

「突然で失礼ですがね、何処此処と云つてるよりか、私の許へ泊つちや何うです。」

「へい、貴方へ。」と、俯向けていた地薄な角刈の頭を擡げて、はぐらかす気か、汗ばんだか、手の甲で目を擦つて、ぎろりと巽の顔を見た。

「何うです、泊りませんか……ツたつてね、私も実は、余所の別荘に食客と云うわけだが、大腹な主人でね、戸締りもしな

い内うちなんだから、一晚、君一人ぐらい、私が引受けて何うにもし  
ますよ。」

「へええ、御串戯ごじようだんを。」と道の前後みまわをして、苦笑いをしつつ、  
ちよつと一寸頭を搔さいたは、扱さは、我が挙動ふるまいを、と思つたろう。

「串戯なもんですか。」

其処が水菓子屋の店前で——異は、別に他に見当らなかつたの  
で、——居合す小僧に振向いて、最もう一軒薬屋はないか、と聞い  
て、心得て出て、更めて言つた。

ほんとう  
「真個ほんとうだよ、君。」

と笑いながら、……もう向うむいて行きかける六蔵を再呼またんで、  
「……今君が通つて来た、あの、旭館と淡路屋と云う大おおきな旅館の

間にある、別荘に居るんだからね。」

「何とも難有ありがてえ思おぼしめし召めで、へい。」

と、も一度笠を出して面つらを伏せて、

「いずれまた……」

「ではさようなら。」

「御機嫌よろしゅう。」

二見ヶ浦を西、東。

思いも掛けない親船に、六はゆすぶつた身体を鎮めて、足腰を  
しやんと行くゆ。

「兄さん、兄さん。」

「親方。」

と若い女が諸声で、やや色染めた紅提灯、松原の茶店から、夕顔別当、白い顔、絞の浴衣が、ひらり 翩然と出て、六でなしを左右から。

「親方。」

「兄さん。」

「ええ、俺おらが事か。兄さん、とけつかつたな。聞馴ききなれねえ口を利

きやあがる。幾干いくらで泊める。こう、旅籠は幾干だ。」

「否いいえ、宿屋じゃありません。まあ、お掛けなさいな。」

「よう一寸。」

「何にも持たねえ、茶代が無えぜ。」

「何んですよ、そんな事は。」

「はてな、聞馴れねえ口を利きやあがる。」

「その代りね、今、親方、其処で口を利いたでしょう。」

「一寸、あの方は何と云つて。矢張り普通の人間とおんなじ口の利き方をなさる事？一寸さあ……」

と衣紋えもんを抜く。

六蔵解よめぬ面の眉を擧しかめ、

「何だ、人間の口の利方ききかただ？……ほい、じゃ、ありや此処ここ等の稲荷様か。」

「まあ！」

「何だい？」

「あら、名題の方じゃありませんか、巽さんと云う俳優やくしやだわよ

。」

「畜生め、此奴等こいつら、道理で騒ぐぜ。むむ、素顔にやはじめてだ。」  
と、遠くを行く辰吉のすらりとした、後姿に伸上る。

「可いわねえ。」と、可厭いやな目色めつき。

「黙ってる。俺もこう見えて江戸児だえどっこ。巽の仮声こわいろがうめえんだ。

……」

「あら、嬉しい。ひい！」と泣声を放つたり。

「馳走をしねえ、聞かして遣やら。二見中の鮑あわびと鯛しよを背負しよつて来や。

熱爛熱爛。」と大手をふった。

これじゃ頓やがて、鼻唄も出そうである。

「もしもし、貴方。」

なまめ  
と媚かしい声。

溝端みぞばたの片陰かたかげに、封袋ふうたいを切つて晃乎きらりとする、薬すずの錫ひねを捻く

つて、伏目ふしめに辰吉たつきちのイんだ容子ようすは、片頬かたほに微笑ほほえみさえ見える。四あ

辺あたりに人の居いない時、こうした形は、子供が鉄砲玉でも買つて来た

ように、邪気あどけな無いものである。

水菓子屋で聞いた薬屋へ行くには、彼は、引返ひっかえして別荘の前

をまた通らねば成ならなかつた。それから路みちを折曲つて、草生くさはえの

空地を抜けて、まばら垣について廻つて、停車場ステーション方角の、新開

と云つた場末らしい、青田も見えて藁屋わらやのある。その中に、廂ひさしに

唐辛子、軒だいたいに橙だいだいの皮を干した、……百姓家の片商売。白髪の婆が目を光らして、見るなよ、見るなよ、と言いそうな古納戸めいた裡なかに、字も絵も解らぬ大衝立おおついたてを置いた。

宝丹は其処にあつたが、不思議に故郷に遠い、旅にある心地がして、巽はふと薄い疲労つかれさえ覺えた。道もやがて別荘の門から十町ばかり離れたろう。

右から左に弁ずる筈を、こうして手に入れた宝丹は、心嬉しく、珍らしい。

「あの、お薬をめしあがりますなら、お湯か何ぞ差上げますわ。」  
唯ふと、片側いっけんたちの一軒立、平屋の白い格子の裡に、薄彩色すその裙すそをばかした、艶なのが、絵のように覗いて立つ。



黒髪は水が垂りそう、櫛巻の房ふっさりとした、瓜核うりざね顔の鼻筋はなはなが通つて、眉の恍惚うっとりした、優しいのが、中形の浴衣に黒縹くろじゆす子の帯をして、片手、その格子に掛けた、二の腕透あざむいて雪を欺したじく、下緊めの浅葱あさぎに挟んで、——玉たまの葱しよぶの茶室かこいを起たつた。——緋ひの袱紗ふくさ、と見えたのは鹿子かのこ絞しぼりの撥ばちぶくろ袋。

片手に象牙の撥ばちぶくろを持ったままで、巽たづねに声を掛けたのである。

薬の錫しやくを持ったなり、浴衣の胸むねに掌てを当てて、その姿を見たが、通りがかりの旅人に、一夜を貸そうと云った矢先、巽たづねは怪む氣もしないで、

「恐入おそいりますな。」

「さあ何うぞ。」

と云つて莞爾にっこりした。が、撥えくぼを挙げて鬢なまめを隠すと、向うむきに格子を離れ、細りほっそした襟の白さ、撫肩なでがたの媚なまめかしさ。浴衣の千鳥が宙に浮いて、ふっと消える、とカチリと鳴る……何処かに撥を置いた音。

すぐに、上あがり框がまちへすつと出て、柱つまさきがくれの半身で、爪つまさき尖がほんのりと、常とこなつ夏なつ淡く人を誘う。

巽なおかまは猶な関かまわず格子を開けた。

「じゃあ御免なさいよ。」

と、土間に釣つた未だ灯を入れない御神燈つるさわみやに蔦の紋、鶴つる沢さわ

宮とし歳とあるのを讀んで、ああ、お師匠さん、と思う時、名の主は……早や次の室まの葭戸よしど越こし、背うしろ姿すがたに、薄うつつりと鉄瓶の湯氣を

かけて、ひとつどころ 一 処 浦の波が月に霞んだようであった。

「恐入ります。」

おんな 婦は声を受けて、何となく、なよやかな袖を揺がしながら、黙つて白湯を注いでいる。

「拝借します。」

と巽は其処の上框へ。

二つ三つ、すらすらと畳触り。で、遠慮したか、葭戸の開いた敷居越に、しな 撓うような膝を支いて、框の隅の柱を楯に、少し前屈みに身を寄せる、としゆす 縷子の帯がキクと鳴る、心の通う音である。

「ぬるまゆ 温湯にいたしましたよ、水が悪うございますから。」

「……御深切に。」

取つた湯呑は定紋着、蔦を染めたが、黄昏に、薄りと蒼ずむと、宮歳の白魚の指に、撥袋の緋が残る。

「ああ、私。」と、ばらりと落すと、下棲の端にちらめいて、瞼に颯と色を染めた、二十三四が艶なる哉。

## 七

「私、何うしたら可いでしょう。極りが悪うござんすわ。」  
と婦は軽く呼吸を継いで、三味線の糸を弾くが如く、指を柱に刻みながら、

「私、お知己でもないお方をお呼び申して、極りが悪いもので

すから、何ですか、ひとりで慌てしまって、御茶台にも気が付きません。……そんな自分の湯呑でなんか。……失礼な、……まあ、何うしたら可ようございましょうね。」

と襟を圧えて俯うつむ向いて、撥袋を取つて背後うしろに投げたが、留南奇とめぎの薫さつが颯さつとして、夕暮の奇くしき花、散らすに惜しき風情あり。辰吉は湯呑を片手に、

「何うしまして、結構です。難ありがと有う。そしてお師匠さん。貴女の芸にあやかりましょう。」

「存じません。」

と、また一刷毛ひとさを染めつつ、

「人様ひとさま御迷惑。蚊柱のように唸うなるんでございますもの、そんな

湯呑には子ぼうふら子が居ると不可いけません。お打うち棄ちりなさいましよ。唯今としか、別のを汲替ええて差上げますから。」と片手たちをついて立ま構ます。

辰吉はおき圧おさえるように、

「ああ、しばらく。貴女あなたがそんな事をお言いなすつちや私は薬が服のめなく成ります。このずうたい図ずうたい体たいで、第一、宝丹を舐めようと云う柄しやちじやないんですもの。鯨しやちや鯨しやちと搦ウニコオル合オルつて、一角丸ウニコオルを棒で嚙かうと云うまどろすじやありませんか。」

おんおんななずずし  
 婦おんが清ない目ずしで、口許ながしめに嬉ちよつとしちよつとそうちよつとな笑ちよつとを浮ながしめべ、流ながしめ晒ながしめに一ちよつと寸ちよつと見ちよつとて、

「まあ、そうしてお商売は、貴方。」

「船頭でさあね。」

「一寸！ 池川さんのお遊び道具の、あの釣船ばかりお漕ぎ遊ばす……」

お師匠さんは御存じだ。

「雑ぎつと、人違いですよ。」と眦まなじりを伏せてぐつと呑んで、

「申もうしか兼ねましたが、もう一杯ちよう。丁ど咽喉が渴いて困っていた、と云う処です。」

艶なお師匠さんは、いそいそして、

「お出ばなにいたしましたしよろね。」

「薬のを服みました後ですから、お湯の方が結構です——何ですか、お稽古は日が暮れてからですか。ああ、いや、それで結構。」

辰吉は錆のある粹わらいな笑で、

「ははは、些ちと厚かましいようですな。」

「沢山たんとおっしやいまし。——否いいえ、最もう片手間の、あの、些少ほんの真

似事でございます。」

「お呼び申せば座敷へも……?」

「可厭いやでございますねえ、貴方。」

と片手おがみの指が撓しなって、

「そんな御義理を遊ばしちや、それじゃ私申訳がありません。それで無くってさえ、お通りがかりをお呼び申して、真個ほんとうに不躰ぶしつけだ、と極りが悪うございましてね、赫々かっかつ逆上のぼせますほどなんですもの。」



身を恥じるように言訳がましく、

「実は、あの、小婢こどもを買ものに出しまして、自分でお温習さくらいでもしましようか、と存じました処が、窓の貴方、葱しのかぶの露の、大きな雫が落ちますように、螢が一つ、飛ぶのが見えたんでございますよ……」

「螢。」

と異は、声に応じて言返した。

「はあ、時節は過ぎましたのを、つい、珍しい。それとも一ツ星の光るお姿か知ら、とそう思つて立つたんですが、うっかり私、撥なんか持つて、螢だったら、それで叩きますつもりだったんでしようかねえ。そんな了簡で、螢なんて、蜻蛉とんぼか蝙蝠こうもりで沢山で

「ございます。」

蜻蛉は寝たから御存じあるまい、軒前を飛ぶ蝙蝠が、べかこ、と赤い舌を出して、

「これは御挨拶だ。」

とひらり翻然やと行る。

## 八

「それですから、ふっと、その格子を覗きました時は、貴方の御お手の御薬の錫をば、あの、螢をおつかまえなすつた、と見ましたんですよ。」

器は巽の手に光る。

彼は掌たなそこに据じつえて熟じつと視みた。

「まあ、お塩梅が沢山たんと悪いんじやありませんか、何しろお上りなすつて、お休みなさいましたら何うでしょう。貴方、御気分は如何です。」と、摺寄つて案じ顔。

巽は眉の凜とした顔を上げて、

「否いいえ、気分は初めから然さしたる事も無いのです。宝丹は道楽に買った、と云つて可いくらいなんです。」

爾時そのとき、袂つっこへ突込んで、

「今の、螢には、何だか少し今度は係かかり合あいがありそうですよ——  
—然うですか、螢を慕つてお師匠さん、貴女格子際へ出なすつた

んだ。」

「貴方のお口から、そんな事、お人の悪い、慕つて、と云う柄じやありません。」

「まあまあ……ですがね、私が宝丹を買いに出たはじまりが、矢張り螢ゆえに、と云つたような訳なんですよ。ふつと、今思出したんです……」

「へええ。」と沈んだような声で言う、宮歳は襟を合せた。

「今度、当地こちらへ来ます時に、然うです。興津おきつ……東海道の興津に、

夏場遊んでる友だちが居て、其処へ一日寄つたもんです。夜汽車が涼しいから、十一時過ぎでした、あの駅から上りに乗つたんですよ、右の船頭が。」

「……はあ、可うよございます。ほほほ。」と笑わらいが散らぬまで、そよそよ、と浅葱の団扇の風を送る。指環の真珠が且かつ涼しい。

「頂戴しますよ。」

と出してあつた薄お納戸の麻の座蒲団をここで敷いて、

「小さな革靴一つぶら下げて、プラットホームから汽車の踏段を踏んで、客室の扉を開けようとする、ほたりと。」

巽は口許の片頬おきを圧おさえて言ったのである。

「虫が来て此処へ留とどつたんです、すつと消きえ際の弱しない稲妻か、と思おもいました。目前まへに光あつたんですから吃びつくり驚おどして、邪険よこしまに引ひ払はうと、最もう汽車が動う出す。

妙たにあとが冷ひやつくのです、濡ぬれてるようにね、擦こつて見ても何

ともないので。

忘れていると、時々冷い。何か、かぶれでもしやしないかしら、  
螢だと思ったものの、それとも出合頭であいがしらに、別の他の毒虫でも  
ありはしないかと、一度洗面台へ行つて洗いましたよ。彼処あそこで顔  
を映して見ても別に何事もないのです、そのうちに紛れてしまう。  
それでも汽車で、うとうとと寝た時には、清水だの、川だの、大  
な湖だの、何でも水の夢ばかり切々きれぎれに見ましてね、繋ぎに目が  
覚める、と丁ど天龍川の上だったり、何処かの野原で、水が流れ  
るように虫の鳴いてた事もありましたがね。最う別に思出しもし  
ないで、つい先刻さつきまでそれ切りで済んでいました。

今しがたです……

池川さんの、二階で、」

と顔を見合せた時、両方で思わず頷く様な瞳を通わず、ト圧えた手を膝にして異はまた笑を含んで、

「……釣舟にしておきましょう、その舟のね、表二階の方へちやぶぶ 餉だい台だいを繋いで、大勢で飲酒のみながら遊んでいたんですが、景色は何

とも言えないけれど、暑いでしょう。この暑さと云ったら暑さが

おもし重石おもしに成つて、人間を、ずんと上から圧おしつ付けるようです。窓から

見る松原の葎よしず簀茶屋と酸漿ほおずき提灯ちようちんと、その影がちらちら砂こぼに溢

れるような緋色の松葉牡丹ばかりが、却つて目に涼しい。海が焼

原に成つて、仕方がない、それじゃ生命も続くまいから、陸おかの方

の青い草木を水にしておけ、と天てん道とうの御情けで、融通をつけて

下さる、と云った陽気ですからね。」

「まあ、随分、ほほほ、もう自棄やけでございますわね、こんなに暑くつちや。」

その癖、見る目も涼しい黒髪。

## 九

「些ちっとでも涼しい心持に成りたくって、其処等の木の葉の青いのを熟じっと視ていて、その目で海を見ると、漸やっと何うやら水らしい色に成ります。」

でないと言ふは真赤ですぜ。日ひざかり盛なんざ火が波を打っているようで



しよう。——さあ、然うなると不思議なもので今も言った通りです。潮煮うしおの鯛の目、鮑の蒸したのが涼しそうで、熱爛の酒がヒヤリと舌に冷いくらい——貴女が云った自棄やけですか——

夕方、今しがた一時ひとしきりは、風の絶頂で口も利けない。餉台を囲んだ人の話声を、じりじりと響くように思つて、傍目も触らないで松原の松を見ていて、その目をやがて海の上にこう返すと、「

異は目を離して指ゆびさしたが、宮歳の顔を見て、鏽さびた声して低く笑つた。

「はははは、ベツかつこをするんじやありませんよ——。然うすると、海の色が朝からはじめて、颯さつと一面に青く澄んで、それが裏座敷の廻まわりえん縁えんの総欄干へ、ひたひたと簾すだれを流すように見えま

してね、縁側へ雪のような波の裾が、すつと柔かに、月もないのに光を誘つて、遙かの沖から、一よせ、寄せるような景色でした。悚ぞつと涼しく成ると、例の頬ほつぺた辺ひやが冷りとなりました、螢の留つた処です。——裏を透して、口の裡うちへ、真珠でも含んだかと思う、光るように胸へ映りました。」

敷居に凭もたれかかり、団扇を落して聞いていた婦おんなは、膝の手を胸へ引いて、肩を細く袖を合せた。

「可いや厭やな心持じやなかつたんです——それが、しかし確に、氷をひとぎれ一片、何処かへ抱いたように急に身を冷して、つるつると融るらしく、脊筋から冷い汗が流れました。香においがします、水のような、あの、螢の。」

月の柳の雫でも夜露となれば身に染みる。

「私は何かに打たれたように、フイと席を立てて戸外へ出ました。まだ明い。内の二階で、波ばかり、青く欄干にかかったようには、暮れてはいません。」

名所図絵にありそうな人通りを見ていると、最う何もかも忘れしました。が、宝丹は用心のために、柄にもない船頭が買ったんですが。

今の螢のお話で、無遠慮に御厄介に成りました。申訳にもと、思いますから、——私も、無理に附着けたらしいかも知れませんが、螢の留ったお話をしたんです。」

と半ば湯呑のあとを飲むと、俯目に紋を見て下に置いた。彼は

歸りがけの片膝を浮かしたのである。

唯、呼吸を詰めて、

「貴方。」

「え。」

余り更まつた婦おんなの氣に引入れられて驚いた体ていに沈んで云つた。

婦おんなは肩を絞るように、身をしめた手を胸に、片手を肱に掛けながら、

「螢じゃありませんわ。螢じゃありませんわ。」

「何がですえ。」

「そりや、あの……何ですよ、屹きつと……そして、その別荘のお二階へ、沖の方から来ましたって、……蒼い、蒼い、蒼い波は。」

柱の姿も蒼白く、顔の色もおもかげだ 倅立って、

「お話を伺いますうちに、私は目に見えますよう。そして、跡を、貴方の跡を追って浪打際が、其処へ門まで参っているようですよ。」

と、黒繻子の帯の色艶やかに、夜を招いてのびあが 伸上る。

白い犬が門を駈けた。

辰吉は腰を掛けつつ、思わず足を爪立てた。

## 十

「貴方、その欄干にかかりましたまっさお 真蒼な波の中に、あのとこなつ 撫子

の花が一束流れますような、薄い紅色の影の映つたのを、もしか、御覧なさはりはしませんか。」

……と云う、瞳の色の美しさ、露を誘つて明<sup>あかる</sup>いまで。その色に誘われて、婦<sup>おんな</sup>が棄てた撥袋の鏡台の端に掛つたのを見た。

我にもあらず茫<sup>ぼう</sup>と成つて、

「彼<sup>あすこ</sup>処に見える……あれですか。」

「否<sup>いいえ</sup>、あんなものじゃありません。」とやや氣<sup>き</sup>組んで言う。

「それでは?……」

「否<sup>いいえ</sup>、紹<sup>ろ</sup>の色なんです。——あの時あの妓<sup>ひと</sup>——は緋の長襦袢を着

ていました。月夜のような群青に、秋草を銀で刺<sup>ぬい</sup>繡<sup>とり</sup>して、ちら

ちらと黄金<sup>きん</sup>の露を置いた、薄いお太鼓をがっくりとゆるくして、

羅うすものの裾すそを敷しいて、乱しどけ次げなさつたら無ない風かぜで、美うつくしい足あし袋ふくろ跣はだし足あしで、  
 そのままスツと、あの別わか荘づらの縁えりを下くだりて、真ま直すぐに小せ石いしの裏うら庭にわを  
 突つ切きると、葉はのままばらな、花はなの大おほきなのが薄うす化粧けしやうして咲さきました  
 、  
 「とと言いう……

大輪おほの雪ゆきは、その棲すまを載のせる翼よくでああつた。

「あの、夕ゆふ顔がほの竹たけの木き戸どに、長ながい袂そでも触ふれなないで、細ほりと出でたで  
 しよう。……松まつの樹きの下したを通とほる時ときは、遠とほい路ぢを行いくようでした。  
 舟ふねの縁へりを伝つたわると、あれ、船み首よしに紅しんい扱ぎ帯きが懸かる、ふらふらと躑よ  
 躑ろたんです……酷こく酔よつていましたわね。

立た直ちつた時とき、すつきりした横よこ顔がほに、纏もつたながら、島しま田た鬘だも姿すがたも  
 据すわりました。

私はその時、隣家の淡路館の裏にあります、ぶらんこを掛けました、柱の処で見えていたんですよ、一昨年ですわね、——巽さん。

と、然しかも震ふるえを帯びた声で、更めて名を呼んで、

「貴方こがに焦こがれて亡く成りました、あの、——小雪さん——の事ですよ。」

実に、それは、小雪は伊勢の名妓であつた。

辰吉は、ハツと気を打って胸を退ひいた。片膝揚かまちげつつうしろ框かまちを背後へ、それが一浪乗って揺れた風情である。

棲に曳いたも水浅葱、団扇の名の深草ならず、宮歳みやとしの姿も波に乗ってぞ語りける。



「不思議ですわね、あの時、海が迎いに来て、渚が、小雪さんに近く成ると、もう白足袋が隠れました。蹴出しけだの棲に、藍がかかつて、見渡す限り渚が白く、海も空も、薄い萌黄でござんした。其処に唯一人、あの妓ひとが立つたんです。笄こうがいがキラキラすると、脊すなりの嫋娜とした、裾の色の紅くれないを、潮が見る見る消して青くします。浪におされて、羅うすものは、その、あの蹴出しにしつとり離れて、取乱したようですが、ああした品の可い人ですから、須磨の浦、明石の浜に、緋の袴で居るようでした。」

——驚破すわ泳ぐ、とその時、池川の縁側では大勢が喝采した。——

「あれあれ渚を離れる、と浪の力に裾を取られて、羅のそのまん

ま、一度肩まで浸りましたね。衝と立つ時、遠浅の青畳、真中とも思うのに、錦の帯の結目が颯と落ちて、夢のような秋草に、濡れた銀の、蒼い露が、雫のように散ったんです。

まあ、顔が真蒼、と思うと、小雪さんは熟と沖を凝視めました。——其処に——貴方のお頭と、真白な肩のあたりが視えましたよ。

近所を漕いだ屋根舟の揺れた事！  
貴方は泳いで在らしたんです。

真裸の男まじりに、三四人、私の知った芸者たちも五六人、ばらばらと浜へ駆けて出る。中には舫った船に乗って、両手を挙げ、呼んだ方もござんした、が、最うその時は波の下で、小雪さ

んの髪が乱れる、と思う。海の空に、珠の簪かんざしの影かしら、晃々きらきら一ツ星が見えました。」

## 十一

「その裸体はだかなのは別荘の爺やさんでございましたってね。」

「さよう治平と云う風呂番です。」と言いながら、翼おもてめんの面は面の如く瞳が据った。

灯ともしなき御神燈は、暮迫る土間の上に、無紋の白張しらはりに髻ほうふつ髻する。

「爺さんが海へ飛込んで、鉛の水を搔くように、足搔あがいて、波を

分けて追掛けましたわね。

丁ど沖から一波立てて、貴方が泳返しておいでなさいます——  
あとで、貴方がお話しなすツたつて……あの、承りましたには、  
仰向けに成つて、浪の下の小雪さんが、……嘸ぞ苦しかったでし  
よう、乳を透して紹の紅い、其処の水が桃色に薄りと搦うつつんでいる、  
胸を細く、両手で軽く襟を取つて、披はだけそうにしていたのが、貴  
方がその傍にお寄りなさいました煽りに、すつと立つて、鬚に水  
をかぶつていて、貴方の胸へ前髪をぐつちより、着つけました時、  
あの、うつくしい白足袋が、——丁ど咽喉のどの処へ潮を受けてお起  
ちなすつた、——貴方の爪先へ、ぴたりと揃つた、と申すじやあ  
りませんか。」

巽は框をすつくと立った！

「……吃驚びっくりなすつて、貴方は、小雪さんの胸を敷いて、前へお流れなさいましたってね。」

「そして驚いて水を飲んだ、今も一斉いつときに飲むような気がします。」と云う顔も白澄むのである。

「其処を爺さんが抜切つて、小雪さんを抱きました。ですけれども、最もうその時、あの妓ひとの呼吸いきは絶えていたのです——あの日は、小雪さんは、大変にお酒を飲んでいたんですってね、茶碗で飲んで、杯洗はいせんまであげたんだそうですね。深酒の上に、急に海へ入ったもんですから、血が留とまってしまつたんでしよう。

そして、死体に成つてから、貴方のお胸に縫すがりつ着いたんじやあ

りませんか、海の中で、」

と膝を寄せる、褌が流れて、婦おんなは翼おんなの手を取った。

指が触ると、掌おんなに、婦おんなの姿は頸うなじの白い、翼の青い、怪しく美し

い鳥しぢかが留ったような気がして、翼の腕は萎えたる如く、往來ゆききに端は

近しぢかな処あたに居ながら、振払うことが出来なかつた。……四辺あたりを見

ると、次の間の長火鉢の傍なる腰窓の竹を透いて、其処あたが空地らしく幻の草が見えた。

「翼さん。」

「……………」

「あの、風呂番の爺さんは、そのまま小雪おぶさんを負おぶい返して、何しろ、水浸しなんですから、すぐにお座敷へは、とそう思ったん

でしよう。一度、あの松に舫もやった、別荘の船の中へ抱だきおろ下しましたわね。雫に浜も美しい……小雪さんの裾を長く曳いた姿が、頭か髪みから濡れてしおしおと舳ふなべりに腰を掛けました。あの、白いとも、蒼いとも玉のように澄んだ顔。紅も散らない唇から、すぐに、吻ほっと息が出ようと、誰も皆思つたのが、一呼吸ひといきの間もなしにバツタリと胴の間へ、島田を崩して倒れたんです。

お浴衣じやありませんでしたけれど、其処みおびにお帯いっしょと一所に。」  
おんなと婦は情に堪えないらしく、いま、翼の帯に、片頬じっを熟と。 ……

…一息して、

「貴方のお召ものが脱いで置いてありました。おんな婦の一念……最もうそれですもの。 ……螢はお迎いに行つたんですよ。欄干にかかり

ました二見ヶ浦の青い波は、沖から、逢いに来たんです。

不便ふびんとお思いなさいまし。小雪さんは一言も何にも口へは出さないで、こがれ死しじをしたんです。

素振そぶり、気振けぶりが精一杯、心は通わしたでしょうのに、普通なみの人より、色も、恋も、百層倍、御存じの貴方でいて、些ちつとも汲んでお遣んなさらない！——否いいえ、小雪さんの心は、よく私が存じております。——

俺は知らない、迷惑だ、と屹きつと貴方は、然そうおつしやいましてようけれど、芸妓つとめしたって、女ひとですもの、分けて、あんな、おとなしい、内気な小雪さんなんですもの、打ちつけに言出せますか。

察しておいで遊ばしながら、——いつも御鼻屑を受けていまし



たものですから、池川さんの、内証の御寵妓おきにいりでもあるように  
 思いなすつて、その義理で、……あれだけに焦れたものを、か  
 なえてお遣んなさらない。……

堅気はそうじゃあござんすまい、こうした稼業の果敢はかない事は、  
 金子かねの力のある人には、屹きつと身を任せている、と思われます。

御酒の上のまま事には、団扇と枕を寝かしておいて、釣手を一  
 ツ貴方にまかして、二人で蚊帳も釣りましたものを。……と言  
 う。

その蚊帳のような、海のような、青いものが、さらさらと肩に  
 かかる、と思うと、いつか我身はまた框かまに掛けつつ、女の顔かほが弗  
 と浮いて、空から熟じつと覗いたのである。

## 十二

「これが俳優やくしやなの。」

「まあ。」

しよろしよろ、浪がなぶ颯なぶるような、ひそひそと耳に囁く声。

松原の茶店の婦おんなの、振舞酒に酔い痴れて、別荘裏なる舫船に鼻唄で踏ふんぞ反ふんぞつて一寝入りぐツと遣つた。が、こんな者に松の露は掛るまい、夜気にこそぐられたように、むずむずと目覚めた六蔵。

胴の間に仰向けで、身うちが冷える。唯と、野宿には心得あり。道中笠を取つて下腹あてへ当あてがつて、案山子かかしが打倒ぶつたおれた形でいたのが。

——はじめは別荘の客、巽辰吉が、一夜の宿をしようと言った、情ある言ことばを忘れず、心に留めて、六が此処に寝たのを知つて、

(船とまに苦ふを茸ふいてくれるのじやないか。)と思つた。  
ふなばた舷へ、かたかたと何やら嵌はめこ込む……

その嵌めるものは、漆塗の艶やかな欄干のようである、……はてな、ひそめく声は女である。——

うまれながらにして大好物。寝た振でいて目を働かすと、舷に立かかつて綺麗な貝の形が見える、大きな蛤。

それが、その貝の口を細く開いた奥に、白しろがね銀の朧なる、たとえば真珠の光があつて、その影が、幽かすかに暗夜やみよに、ものの形を映うつし出す。

「芸妓が化けたんだ、そんな姿で踊おどりでも踊おどりっていたらう。」  
 時に、そんなのが一個ひとつではない。左舷の処にも立っている。こ  
 れも同じように、舷へ一方から欄干らしいものを嵌めた、かたり、  
 と響く。

外にもまだ居る……三四人、皆おなじ蛤の姿である。

「祭礼まつりの揃そろいかな、蛤提灯——こんなのに河豚さげえも栄螺さげえもある、畑の  
 ものじゃ瓜もあら。……茄子なすびもあら。」

但しその提灯を持つているものの形は分らぬ。が、蛤の姿であ  
 る……と云うのが、衣服きもの、その袖、その帯と思う処がいずれも同  
 じ蛤で、顔と見るのが蛤で、目鼻と思ひ、口と思ひのが蛤で、そ  
 して灯ともしびが蛤である。

襟か袖かであるらしく、且つ暗の綾の、薄紫の影が籠む。

時にかたかたと響いて、二三人で捧げ持った氣勢がして、婦の袖の香立蔽い、船に柱の用意があつて、空を包んで、トンと据えたは、屋根船の屋根めいて、それも漆の塗の艶、星の如き唐草の蒔絵が散つた。左舷右舷も青貝摺。

六蔵は雛壇で見て覚えのある車のように、と偶と思う。

時に、蛤が口を開いた。否、提灯が、真珠の灯を向けたのである、六の顔へ——そして女の声で言つた。

「これが俳優なの？」

「まあ。」

「醜い俳優だわね。」

——ままにしろ、此奴等——と心の裡で、六蔵は苦り切る。

「まだ、来ていやしまいと思つたのに、」

「そして、寝ているんだもの、情のない。」

「心中の対手あいての方が、さきへ来て寝ているなんて。」

「ねえ、」

と応じて、呆れたように云つた、と思うと、ざつと浪が鳴つて、潮が退いたらしく寂ひっそり寞する。

欄干も、屋根も、はつと消えて、蒔絵も星も真の暗闇やみ。

直ぐに、ひたひた、と蹠あしおと音して、誰か舷へ来たらしい。

透通るような声が、露に濡れて、もの優しい湿うるみを帯びつつ、

「……巽さん。」

途端に、はっと衣の香と、冷い黒髪の薫かおりがした。

「ああれ、違つて……違つているよう。」

### 十三

蛤の灯がほんのりと、再来またて……

「お退どきよ、退どいておくれよ。」

「よう、お前。」

と言う。……人をつけ、蛤なんぞに、お前呼あばわりをされる兄あでにいないぞよ。

「此処は、今夜用がある。」

「大事の処なんだから。」

「よう。」

「仕ようがない。ね、酔っぱらって。」

「臭い事。」

「憎らしい、松葉で突つつッいて遣りましょう。」

敏捷すばやい、お転婆なのが、すつと幹をかけて枝に登った。呀や、松

の中に蛤そそが、明く真珠を振向ける、と一時ひとしきり、一時、雨の如く松葉がそそ灌ぐ。

「お、痛いた。」

「何うしたの。」と下から云う。

松の上なが、興きようがきようつた声をして、



「松葉が私をくすぐ撥るわよ、おほほ、おほほ。」

「わはは。」と浜の松が、枝を揺つてどつ哄と笑う。

「きやツ。」と我ながら猿のような声して笑つて、六蔵はむつくと起きて、

「姉等あねえら、仕立ものの用はねえか。」と、きよとんとしてあたり四辺を視た。

浅葱をかえ翻す白浪や。

燃ゆるが如き緋の裳もすそ、浪にすつくと小雪の姿。あの、顔の色、

瞳の艶、——恋に死ぬ身は美しや、島田のままの星である。

蛤が六つ七つ、むらむらと渚を泳いで、左右を照らす、真珠の光。

凄じいほど氣高い顔が、一目、怨めしそうに六蔵の面おもてを視て、さしうつつむいて、頸えり白く、羅の両袖を胸むしに犇かきあわと搔合す、と見ると浪が打ち、打ち重つて、裳を包み、帯を消し、胸をかくし、島田鬻の浮んだ上に、白い潮がさらり、と立つ。と磯際の高波は、何とてそのまま沖に退くべき。

颯と寄る浪がしら、雪なす獅子の毛の如く、別荘の二階を包んで、真まつさお蒼さおに光る、と見る、とこの小舟は揺上つて、松の梢すてつに、ゆらりと乗るや、尾張を越して富士山が向うに見えて、六蔵すてつ天ぺん辺べんに仰天した。

這しやつ奴横紙を破つても、縦に舟を漕ぐ事能わず、剩あまつさろかいえ櫓ろかい櫓ろかいもない。「わああ、助けてくれ、助たすけぶね船ね。」

「何うしました、何うした。」

人目を忍んで、暗夜やみよを宮歳と二人で来た、巽は船のへりに立つと、突いきなり然跳起きて大手を拈げて、且つ船から転がり出した六蔵のために驚かされた。

菩提所の——巽は既に詣ではしたが——其処ではない。別荘の釣舟は、海に溺れた小雪が魂をのせた墓である。

「小雪さんを私と思つて。」……

あの、船で手を取つて、あわれ、生命掛けた恋人の、口ずから、切せめて、最愛いとしいい、と云つて欲ほしい、可哀相とだけでも聞かし給え。

御神燈は未だ白かつたのに、夜の暗さ、別荘の門、街道も寝静まる、夢地を辿る心地して、宮歳のかよわい手に、辰吉は袖を引

かれて来たのであった。

「へい、仕立ものの御用はねえかね。」

きよろん、とした六蔵より、巽が却つて茫然とした。

宮歳の姿は、潮の香の漾ただよう如く消えたのである。

別荘の主人池川の云うのには、その宮歳は、小雪と姉妹のよう  
に仲のよかつた芸妓である。

内証ながら、山田の御師おし、何某なにがしにひかされて、成程、現に師  
匠をしている、が、それは、山田の廓、新道の、俗に螢小路と云  
う処なまめに媚なまめかしく、意気である。

言語道断、昨夜急ゆうべに二見ヶ浦へ引越して来る筈はない！  
扱さて翌朝の事であつた。

電話で、新道の一茶屋<sup>ある</sup>へ、宮歳<sup>みやとし</sup>の消息を聞合せると、ぶらぶら病で寝ていたが、昨日急に、変<sup>へん</sup>が変<sup>かわ</sup>つて世を去つた。

——写真を抱いていましたよ、死際に薄化粧して……巽<sup>つとむ</sup>さんによろしく……——

その時、別荘の座敷の色は、二見ヶ浦の、海の蒼いよりも藍<sup>あいな</sup>であつた。

簾に寄る白浪は、雪の降るより尚<sup>な</sup>お冷い。

その朝、六歳も別荘の客の一人であつた。が、お先<sup>まへ</sup>ばしりで、衆<sup>ひと</sup>と一<sup>いつ</sup>所に、草の径<sup>こみち</sup>を、幻の跡を尋ねた——確に此処<sup>こゝ</sup>ぞ、と云う処に、常夏<sup>とこ</sup>がはらはら咲いて、草の根の露に濡れつつ、白檀<sup>びやくだん</sup>の蒔<sup>ま</sup>絵の、あわれに潮にすさんだ折櫛<sup>せし</sup>が——その絵の螢<sup>へい</sup>が幽<sup>く</sup>に照<sup>て</sup>つ

た。

松に舫つた釣舟は、主人あるじの情なさけで、別荘の庭に草を植え、薄、刈かるかや、萱おみなえし、女郎花ききよう、桔梗ききようの露に燈籠を点して、一つ、二見の名所である。

(『新小説』一九一六「大正五」年四月号)

# 青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選・特別篇 鏡花百物語集」ちくま文庫、  
筑摩書房

2009（平成21）年7月10日第1刷発行

初出：「新小説」

1916（大正5）年4月号

※「一寸」に対するルビの「ちやと」と「ちよつと」の混在は、  
底本通りです。

入力：門田裕志

校正：砂場清隆

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 浮舟

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>